

インフルエンザワクチン

2007.10.02

夏の閑散とした外来から、9月の中旬からは喘息発作で吸入をしたり、点滴をしたりといつもの忙しい外来となりました。夏風邪といわれるヘルパンギーナや手足口病はピークを過ぎましたが、嘔吐や下痢を伴うウイルス性胃腸炎は増加傾向にあり、秋の訪れとともに子ども達には辛い季節が始まったようです。

10月の連休明けから、多くの医療機関でインフルエンザワクチンが始まろうとしています。昨シーズン、私のところでインフルエンザと検査や症状から診断し治療をしたお子さんは延べ500名強でしたが、概ねワクチンをして罹ったお子さんは軽症の印象でした。

年齢別では6歳ぐらいが一番のピークで2歳前のお子さんはほとんどいませんでした。インフルエンザが原因で入院を余儀なくされるお子さんがほとんどいなかったのは、不幸中の幸いでした。

ワクチンはそれまでの流行から判断してワクチンの株が決められます。今年はソ連型の株が変更になりました。1歳以下のお子さんはワクチンによってインフルエンザに対する抵抗力が上がることは知られていますが、感染を防ぐという意味でほんとに必要なかといわれると、私は他のワクチンの予定をまげてまではする必要がないのではと思っています。1歳前後のお子さんはインフルエンザワクチンよりMRワクチンを優先してください。

外来小児科学会が作っているインフルエンザワクチンのパンフレットには接種を勧める人を、受験生など3日以上休むことが困難な人とその家族、学校の教師、保育士、医療関係者など子どもと接する職業に関わる人、65歳以上の方、および65歳以上の方と同居されている人、保育所、幼稚園、学校など集団生活をしている人、新生児や乳幼児と同居をしている家族としています。当てはまる方は12月中旬までに、かかりつけの先生と相談して打つようにしてください。1回目と2回目の間は4週間が一番効果的といわれています。